

## 職場だより

卒業して十年、その殆どの八年余を厚生省児童局に勤め、この四月より現在の国立世田谷病院に転勤いたしました為、未だ不慣れでありますし、私自身、職業に対しての未解決な問題が多くこの欄に筆をとりますのは不適當とは存じますがおすすめに従い、私の生活の中より職場に関するものをまとめました。

四月〇日 此処に転動してか

ら一週間過ぎた。気持だけは張切つているにもかかわらず、仕事は全く始めての事ばかりで捗らない。人事院のレントゲン被曝調査が先ず最初の仕事である。右を向いても左を向いても全く知らぬ人の中でX線技師とX線料の医長の医者の名前を数えて貰い、直接撮影とが治療の件数、業務に当る人数、職務分担、一日の被曝量等をメモを手聞きに行く。病院自体の空気もわからず、又レントゲンに関してわからぬ事だらけの私の質問に医者は業を煮やしてどなり出すし、技師は不勉強でと逃げて了う。仕方なく器械の種類、台数等を調べ、後は家で何か引張り出して調べて

みようと定める。庶務は人事に関する仕事が多いから出来るだけ名前を覚えるよう云われたが、二百人以上の職員は全く皆一様にみえて名前どころか、自分の係の人の顔・名前でやつとである。

食事・子供の世話等慌しくすませ、ねせつけてから、主人の資料に整理してある一昨年からの新聞を引張り出し、原子爆弾に

## 世田谷病院だより

世田谷病院勤務  
厚生事務官

坂 井 桂 子  
(四十五回生)

思い乍ら茶の間にポソポソ今の事を話すと、要を得た話でまともてくれたので、ガサガサした頭に多少筋が通り、気持も幾分軽くなつて就寝。

八月〇日 児童局からこの病院に来て三カ月。病院の機能が掴めなくて焦立つ。医療社会事業をという話だつたが、当分庶務をやつてくれとの事で職員に関する事とか図表の方をやつている。今までどちらかと申せば技術屋的な事務屋で通つて来た私にと危惧したが、官吏の世界に居る限り必ず転勤はあるのだし、或面から考えれば、これも一つのよい機会と、この純然たる事務屋の一時期を有効に過そうと思つている。

関する記事特に第五福竜丸事件の起つてからの久保山氏の記事とか厚生省発表のレントゲン被曝許要量の記事をメモしたり切り抜いたりする。医学生弟の本を借りて読む。しかし瞬間に時のみ過ぎ、尚まだ宙をつかむような状態、こんな時新聞記者だつたら、どんなにして知識を得るだろう等の整理する。専門家としての医者・看護婦・保母等に育てられ乍ら、尚愛情不足の為、心の発育のみならず体の方迄も遅れるといふ。果して一般の子供達より発育が遅いかをみる訳だが、入所の時の各人の環境、発育状態とか入所の期間を併せ観察して行くのだから面倒である。今夜は二十名がやつ

職場だより

と。この子供達は自分が望んだ訳でもなく、棄児・孤児、親が結核で感染危険濃厚とか、片親しかないとか、受刑中とか、種種の理由で親と別れて社会に育てられていく。昼間子供を他に託して職場に働く母親の立場として子供たちの心身の正常な発育には非常に関心が深いし、折にふれて乳児院のみでなく保育所についても資料を探して居たのでこの仕事は好都合、ホーム・ワークとしてどんな職場に行つても、又何かの都合で仕事をやめたにしてもこの保育所・乳児院の問題は統けてやつて行きたい。つくづくと時間が欲しいと思う。又つくづくと己れの勉強不足が惜なくなる。特に経済の知識不足が痛感される。語学ももつと堪能なら幾らでも外国の資料も集められるのに――。

○月○日

今日は総婦長指揮の下に手術室勤務の看護婦の業務記録測定が行われた。看護婦が重労働であるとは皆が認めつつも、それを立証する広範囲の対象を持つたよい調査は余り行われていない。この度の調査は五国立病院に於て実施され、まとめるとの話である。学生の頃、労研の藤本先生指導で省

線の女車掌のタイム・レコードをとつた事を思い出す。

病院の職員は三分の一を占める看護婦の問題は病院運営の一つのキーポイントだ。最近の医療制度には、完全看護・完全給食・完全寝具制が採用され、患者は身一つで入院すれば、蒲団も付添もいらず、患者食として充分の栄養をもつ食事が給され非常に便利になつたがそれ丈に国立の場合等人員整理こそすれ人員増加等は望むべくもなく看護婦の労働は非常に重い。ちなみに本院はベッド数四百床、病棟看護婦約七十名で、之が一日二十四時間を八時間ずつ三交代する。

この重労働に係らず彼女等は自身達の身分の保障の為に助産婦看護婦保健婦法という法律を持ち、職域代表である国会議員を二、三名持つて居るから、一般女子勤労者の泣寝入りもなく安心してその職を全うする事が出来る。之は殆どが女性によつて占められている職場であることと、永い間の多くの先輩の努力・忍従・犠牲・団結等の歴史の齎した結果であらう。私達もその苦闘の歴史には学ぶ事多く、反省させられる点が多い。

本学科卒業生の進路

本学科の卒業生は、社会事業学部当初より現在迄、約一〇〇〇名に及び、各種社会福祉事業の施設は勿論、官庁、学校、会社、ジャーナリズム関係等に、それぞれ重要な地位を占め、優秀な業績を挙げている。又、家庭婦人も、地域社会の婦人団体を始め、各種の社会活動に参加し、指導的役割を果している。

昭和三〇年度の卒業生四四名中の就職状況は左の通りである。

	項目	人員	%
就職	関係事業(社会事業)	10	23
	社会(社会)	1	2
	各官庁(社会)	3	6
	各種学校教職員関係	1	2
	官庁学校教職員関係その他	4	8
進学	大学の進学	3	6
	家庭にある者	20	48
計		44	100